

〔研究ノート〕

組織論で読み解く

江戸時代(2)

遠田雄志 / 小川 格*

目次

はじめに

I. 組織としての江戸時代

1. 組織の常識

1.1 鎖国

1.2 米本位制

1.3 参勤交代

1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)

2. 成長ゆえの衰退

2.1 武士が武器を独占した社会

2.2 幕府を支えた譜代家臣団

2.3 徳川幕府の金、物、人

2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折

(以上本号)

3. 変化の気づき

4. 常識への疑い

5. 再生あるいは没落

II. 江戸時代の春夏秋冬

1. 革新局面前期＝動乱期後期〔春〕

2. 革新局面後期〔夏〕

3. 保守局面前期〔秋〕

4. 保守局面後期＝動乱期前期〔冬〕

III. 江戸時代の意味するもの

おわりに

2. 成長ゆえの衰退

「停滞は許されない。後退などもつてのほか。」

「成長あるのみ。成長なくして繁栄なし。」

この執拗な成長志向が企業経営はもとより、経済や政治それにわれわれ現代人の思考をも支配している。そして、中国やインドの経済成長

に煽られてか、日本やアメリカは成長戦略の模索に余念がない。

歴史を振り返ってみよう。ひとり繁栄を謳歌していた古代ローマ帝国はすでに無く、7つの海を支配した大英帝国も今や昔日の面影はない。GMやJALの栄光と没落は多くの人の知るところである。また、1億5,000万年以上にわたりわがもの顔で地上を闊歩していた恐竜ですら絶滅の運命を免れえなかった。さらに地球を痛めつけて止まない人類の未来についてローマクラブは、1972年に、現在の成長率が不変のまま続ければ、来るべき100年以内に地球上の成長は限界点に到達するであろう、と警告を発している(D.H.メドゥズ他『成長の限界』)。歴史は永遠の成長そして繁栄などないと教えている。

果たして、現代人のみがこの歴史の教訓から例外でありうるのか。組織の適応モデルはこの問題にどう応えているのだろうか。

組織はそれぞれ固有のまとまりや秩序を形成・維持している。そのベースとなっているのが、組織の常識である。組織の常識はまた、その組織のかかわる環境を規定する(したがって同じ自動車メーカーでも、トヨタと三菱自動車のそれぞれの常識が異なるので、トヨタのビジネス環境と三菱自動車のそれとは大違いなのである)。これらのことは、前節のとくに鎖国という常識を想起すればよく理解できるであろう。

それはともかく、組織は今かかわっている環境の例えば人、物、金、あるいは情報や期待といった有形、無形の資源を利用して常識にそった秩序の建設・維持に励む。

秩序が次第に確立され、それにともない組織が成長し繁栄するほどに、そうした資源がより大量に必要となり、消費される。しかし、それらには必ず量的な限界というものがある。

あるいは、そうした資源は利用され消費されて、やがて老廃物となる。組織の目的達成に必要なとされた資源がさんざん利用され、目的が達成されたとたんにそれが無用になり、あまつさえ足枷となることすらよくある。

他方、組織は成長するほどに、管理能力をより必要とする。しかも組織の管理能力には必ず限界がある。組織の管理能力以上の成長はそもそも無理で、途方もなく管理コストがかかることは最近のトヨタのリコール騒動からも明らかであろう。

こうした資源の量的限界あるいは老廃物化さらに管理の限界のため、これまで繁栄をもたらしていたものが逆にネックになり、やがて成長がストップし、組織は衰退していく。成長ゆえの衰退である。和語ではこれを“盛者必衰の理”という。

要するに、組織は現在かかっている環境の中で、成長そして衰退していく。組織のこうした盛衰の過程は、一般に図1のような凸型曲線として描ける。

この凸型曲線を見て、世を悲観することはない。物事には影の面もあれば光の面もある。たとえば、人類の宿痾の敵ウイルスによるインフルエンザである。新型インフルエンザの感染力がきわめて強力でそのピーク時に何千万人も死者がでたとしても、“成長ゆえの衰退”という大原則が世にある限り、それは必ず収束する（この場合、

資源とはそのウイルスにとって免疫力が弱い人と考えてよい）。

それはともかく組織が時代をこえて長期にわたって存続していくには、組織はそれがかわる環境とそれに対応する常識を次々と変え、成長と衰退のサイクルを繰り返していかなければならない。これが組織の適応というものである。

その点、先のインフルエンザ・ウイルスは適応力がきわめて高い。というのは、それがかかっている環境が廃れるとすぐに変種が現れ、新たにかかわる環境を容易に創造してしまうからである。

さて、江戸時代の成長と衰退というとき、何をもってそれを測るのか。米の生産高や人口あるいは元禄や文化・文政といった隆盛な文化または人々の暮らし向き等々の事項が、そのインデックスとして考えられる。しかし、それらはいずれも江戸時代という時代の流れ全体を捉えるには、あまりにも表面的で局所的である。

江戸時代を概観して言えることは、それが長期にわたって平和な安定した社会だったということである。そして、そうした社会を終始統制していたのが徳川幕府の権力であった。したがって、江戸時代の成長と衰退の骨太なインデックスとして幕府の統制力を考えてみたい。

以下そうした徳川幕府の権力の基本的源資としての武力と人々の期待を中心に金、物、人、といった資源の実態とそれに対応した江戸時代の盛衰をフォローしてみよう。

2.1 武士が武器を独占した社会

大仏殿建立の本当のねらい

京都東山、三十三間堂と京都博物館に挟まれて、方広寺という寺がある。ここはかつて豊臣秀吉が大仏殿を建てた場所である。敷地も広大なものであったらしいが、大仏殿も大仏自身も、奈良の大仏をしのぐ巨大なものであったようだ。

秀吉が全国制覇を成し遂げ、大坂城、聚楽第、伏見城と巨大な建造物を造り続け、最後に豊臣家と国家の安泰を祈願して造営したのがこの方広寺大仏殿であった。

天正14年（1586）5月15日に、定礎式と地鎮祭を行ったが、秀吉が普請の衆に振る舞うための

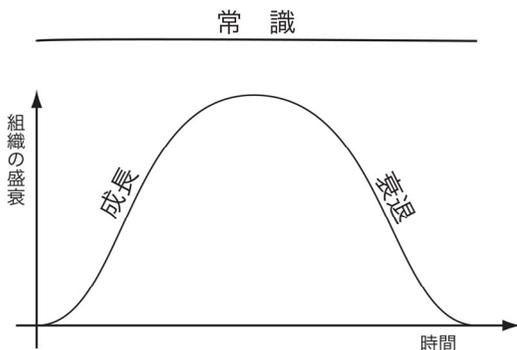


図1 組織の成長と衰退

餅と酒を、京の町衆に車に引かせ、笛と太鼓の囃しにのって4千人が踊るなかを運送させたというから、京の町を上げての盛大なお祭り騒ぎのなかで工事が始ったわけだ。この大仏殿造営のため秀吉は全国の大名に材木の抛出を要求し、膨大な人足を集めた。近隣五カ国から集めた大工、鍛冶、石切、屋根葺きなどの職人が、始めの3年間だけで60万5千人に達したというから途方もない工事であったことがわかる。それから10年の月日を費やして1595年にやっと完成した。

寺域も広大であったらしいが、復元図を見ると大仏殿は大坂城を呑み込むほど巨大なものだった。大仏自身も奈良東大寺の大仏を超える高さ19メートルと巨大なものであったという。しかし、その大仏は、東大寺の大仏とは異なり木造にしっくい漆塗りというものであった。なんでも日本一でなければ気の済まない秀吉にしては、いささか気の抜けたこけおどしのような印象をまぬがれないものである。

残念なことに、この大仏、完成の翌年、開眼供養も終わらないうちに地震で倒壊してしまったのである。しかも、この寺、秀吉の死後その子秀頼により再建されたのだが、その鐘の銘に対して家康に言いがかりをつけられて、大坂冬の陣開戦のきっかけをつくり、ついに豊臣家を滅亡させてしまうという、豊臣家にとっては不吉な因縁がつきまとう代物であった。

この大仏にこけおどしの印象を抱かせるのは、他にも理由がある。

大仏殿造営と並行して、全国的に行われた刀狩りにその秘密があった。

刀狩り

秀吉は天正16年(1588)7月全国の大名・領主に対して「刀狩令」を発令した。刀狩令は3カ条からなっている。

その第1条は「諸国の百姓ら、刀、脇差、弓、鏝、鉄砲、そのほか武具のたぐい、所持をかたく禁止する」と、百姓が一切の武器を所有することを禁止するむねを、単純明快に命じている。

続けて、その目的は、百姓が武器をもてば、年貢を遅らせ、一揆を企て、領主に反抗するものでてくる。もちろんそのような者は成敗す

る。しかしそうしていると田畑が不作となり、年貢がとれなくなる。だから武器を取り上げて進ませよ、とその理由を述べている。もちろんこれは大名、領主に対する説明である。

百姓に対してはそうは言わない。百姓に対する説明として、第2条に、百姓から取り上げる刀、脇差は京都東山に建てている大仏殿の釘・かすがいに使う。そうすれば百姓たちはみ仏と深い縁で結ばれ、あの世でも救われると説いているのである。

大仏殿の造営は、刀狩りの理由造りのための一大デモンストレーションでもあったのだ。なんとなくこけおどしの大仏になった理由も分かるような気がするではないか。

現代の我々の感覚からすると見え透いた理屈のようにも見えるが、浄土信仰の浸透していたこの時代にはかなりの説得力があったのかもしれない。

8月にはさっそく越後国新発田藩の大名溝口秀勝から、刀・脇差など4千点にのぼる武器が送られてきたのを始め、毛利輝元は刀剣を積んだ舟を6隻も送ったなど全国からぞくぞくと武器が集まってきた。

刀狩りによって武器が武士に独占されたことは、以後の日本社会の構造の大変革をもたらした。

武士と農民の分離

中世の農村は常に武装した夜盗集団に襲われる危険にさらされていたから、農民は自ら武装して自分の生命と財産を守らなければならなかった。このため、ほとんどの農民が刀、槍などを所有し、いつでも戦える兵士でもあった。当然のことながら、当時の農村には大量の武器があった。

また、いくさのたびに駆り出され、多くの犠牲者を出したのも農民であった。

さらに、地侍、僧兵、農民が結びついて立ち上がる一揆は、信長、秀吉などの権力者を脅かす大勢力をなした。

こうした一揆を制圧し、刀狩りのきっかけをつくったのが秀吉の紀州攻めである。

信長の突然の死後、いち早く立ち上がった秀

吉は、まず明智光秀を撃ち、返す刀で、他の武将との戦いを制し、信長の後継者の地位を確保した。続いて足元の紀伊半島の制圧に乗りだした。いわゆる紀州攻めである。ここは一向一揆、雑賀一揆、根来衆など宗教勢力と地侍が結合し、強固な一大勢力を形成していた。

秀吉は総勢10万という圧倒的な兵力をもって、一揆勢をつぎつぎに制圧していったが、最大の拠点の一つ、強大な軍事力と共に文化の中心でもあった根来寺（ねごろじ）では山内2千余坊といわれた坊舎のほとんどを焼き尽くして制圧した。こうして紀伊半島の抵抗勢力はことごとく制圧されたが、この戦いで秀吉軍は1万人あまりの戦死者をだし、一揆側の犠牲者は1万5千人に達したといわれている。いかに一揆側の反撃が強力であったかを物語るものであろう。同時にこの数字は僧兵、土豪、農民らが、戦国武将軍団に劣らぬ戦闘力をもっていたこと、さらに秀吉軍が相当にてこずったことを推測させる数字である。

一揆側の最後のとりで、太田城を開城させた秀吉は、ただちに「悪逆棟梁の奴ばらの首は切るが、武器を放棄して農村に帰る百姓は助ける」として、53人の首謀者の首を切り、「百姓は以後、弓、鎗、鉄砲、刀等をすてて、鋤、鍬等農具に親しみ、耕作に専念せよ」と命じた。籠城したものうち、武器をすてて農民になるものは放免されたが、地侍にとどまろうとしたものはことごとく首を切られたのである。

また、さらに強大な武力を誇示していた僧侶に対しても武器をすてて信仰に専念することを求めた。

刀狩りが造りだした兵農分離の社会

こうして行われた刀狩りは、百姓からあらゆる武器をとりあげてを指示していた。武器とは、鉄砲、槍、刀、脇差、などであるが、なかでも重視されたのが、刀、脇差であった。鉄砲は種子島に伝来して以来、国産化がすすみ戦国の覇者を定める最も強力な武器であったはずだが、意外なことに百姓の鉄砲はほとんどが百姓の手に残された。

今日と同様、いやそれ以上に田畑の鳥獣によ

る被害が多かったためである。

特に山地に接した田畑は熊、猪、鹿、猿などに荒らされていた。江戸前期は特に新田開発の時代であり、動物の生息域に人の生活圏が入り込み、その結果、動物たちとの接触が多発したと考えられる。

これは、百姓から武器を取り上げるという目的からすると意外であるが、さらに意外なことに、はげしい百姓一揆が多発した幕末まで、江戸時代を通じて百姓一揆において鉄砲が使われた形跡はほとんどなかったらしい。幕府や諸藩の鎮圧側も一揆に対して鉄砲は使わなかった。鉄砲は人に対しては使わないという不文律が江戸時代を通して了解されていたと藤本久志はいう。(2005年『刀狩り』岩波新書)

つまり、刀狩りの主たるターゲットは鉄砲ではなく、あくまでも刀と脇差だったのである。

では、刀狩りの本当の目的はいったい何だったのか。それは、百姓から刀を奪うことによって、百姓と武士の身分の区別を確定することだった。

刀は武器であるとともに武士の身分のあかしであり、武士のプライドを象徴するシンボルとなったのである。刀は武士の魂などと表現された。

こうして、刀狩りによって、常に刀と脇差で武装した武士と、刀をもたない百姓（農工商）とに社会が二分され、しかも全人口の7%といわれた武士は、土を離れ都市に集まった。農民は刀の代りに農機具を手にして農業に専念することを求められた。こうして武士と百姓を分離する兵農分離の社会構造が出来上がったのである。

2.2 幕府を支えた譜代家臣団

幕府権力の源資、武力

秀吉が作った兵農分離の社会構造は、秀吉の死後も関ヶ原の合戦を制した家康にそのまま引き継がれた。家康による幕藩体制という新しい秩序の形成に与ったのは家康の軍事力であった。とはいえ、当初はそれが他の軍事力に比べ圧倒的であったかといえ、そうではない。家康の軍事力が他の諸大名のそれにわずかに勝っていたのは譜代家臣団の比類ない忠誠心に裏付けら

れた武力であった。その頃ははまだ隙あらばと窺う外様の諸藩や秀吉恩顧の大名の武力には侮れないものがあり、幕府の武力といっても相対的にはさほど大きくはなかった。その意味で、徳川幕藩体制はまだまだ脆弱だったのである。組織に限らず何事もその生まれたては危なげなものなのだ。

しかし、幕府は、大坂冬の陣・夏の陣とその戦後処理としての改易、転封などを通して敵対的な諸藩の武力を殺ぎ、自らの武力を相対的に強めていった。

徳川幕府の権力は、こうして大きくなっていく幕府の武力という源資を利用して徐々に強大になり、幕藩体制もそれにとまって次第に定着していった。そして定着していく幕藩体制は例えば一国一城令や城の増改築禁止を定めた武家諸法度などを通して幕府の武力をそして権力をさらに強化した。

福島正則の改易事件はその典型的な事例である。秀吉の手足となって、その天下取りを助けた正則は、石田三成を憎むあまり、関ヶ原の合戦において家康に味方し、東軍の勝利に寄与した。この功績により安芸・備後49万8千石を与えられ広島城へ移封となったが、たった20年ほど後に、台風によって破損した石垣を修理したことを理由に、武家諸法度違反として改易された。

この間は、徳川幕府にとっては良循環で、組織としての江戸時代の成長過程であった。八代将軍吉宗の治世がこうした成長のピークであったといえよう。

しかし、武力というものは大きなパラドックスを内包している。武力が目的とする秩序を築き確立するにつれて、それ自身無用な老廃物と化してしまうのである。東西冷戦が終結した今、文字通り老廃物と化した核兵器の処理に米露は頭を痛めている。

幕藩体制が確立し、社会が安定し平和になると、武力の老廃物化が始まる。徳川幕府を支えてきた譜代家臣団の武力もこの老廃物化を逃れることはできなかった。いや、それが中世戦国時代をひときわ象徴する武力であったので、それは単なる無用の存在以上に軍勢力の近代化を

阻む足枷となった。他方、拡充された幕藩体制の維持管理のコストが幕府に重くのしかかってきた。これらのことから、幕府の権威が翳りを見せ始め（幕府財政の立て直しを計って各藩の石高、一万石につき百石を上納されたいと吉宗が伏して懇請したのはその一例である）、幕藩体制も次第に緩んでいった。

幕府と諸藩との武力の差が小さくなると幕府の統制力も弱くなり、幕藩体制がいつそう緩み、天保の改革において江戸、大坂の周辺10里四方を幕府直轄領にしようとしたが、諸藩の反対にあい失敗した。

さらに幕末になると、例えば佐賀藩では、藩政改革によって獲得した資金にものを言わせて大型の反射炉を築き、大規模な製鉄を始め、鉄製の大型大砲を大量に铸造し、さらにその技術を他藩にも与え、ついには幕府から大砲铸造の依頼を受けるまでに到るのであった。

徳川幕府にとって悪循環である。こうした流れは止まらず、ついには有力諸藩の近代化された武力が幕府の武力を圧倒し、幕末の倒幕へと至るのである。この間は、組織としての江戸時代の衰退、そして没落の過程である。

それでは、徳川幕府を支えた譜代家臣団について少しばかり述べてみよう。

家康の宝とは？

ある時、諸大名が集まった席で、秀吉は、「自分は、虚堂の墨跡や栗田口の太刀をはじめ、かずかずの宝をもっているが、おのおのの宝は何か」と問いかけた。

毛利輝元や宇喜田秀家はいろいろと所持の品を述べたが、家康は、「私は、三河の片田舎に生まれたので、珍しい書画調度は何ももっておりませぬ。しかし、自分のためなら、水火のなかに入っても、命を惜しまないものが5百騎ばかりおります。これが私の一番の宝でござる」

と答えた。これを聞いた秀吉は多に恥じ、「自分も、そのような宝がほしい」とうらやましがった。（藤野保『徳川幕閣』中公新書1965）

家康には、三河地方で何代にもわたって育ん

できた強力な譜代の家臣たちがいたのだ。

こうした水火の中でも命を惜しまぬ家臣をもっていたか否かが、一代限りで終わった秀吉と、15代260年続いた家康の明暗を分けた最大の要素である。

こうした譜代家臣団があつてこそ、家康は天下をとり、それを永年にわたって維持できたのである。

言い換えれば、徳川家はこうした強力な武力をバックに種々の資源を利用し消費して永きにわたって江戸時代を支配したのである。

秀吉はずば抜けた機略と人心を掌握する天賦の才能をもっていたが、何といても貧農から一代で成り上がった戦国武将の一人であった。

これに対し家康は三河地方に何代にもわたって強力な武将を輩出し、永年にわたって生死をともにした配下の武将を養ってきたのである。三河は西に織田、東に武田、今川という強大な勢力にはさまれて常に侵略の恐れにさらされ、特に家康の若年時（8歳～19歳）の12年間、今川義元の人質として駿府（静岡市）にとらわれていた時代、配下の家臣たちの苦労は並みたくないものではなかった。

大久保彦左衛門の兄弟

こうした逆境にめげず主君を支えた武将たちの中に大久保忠世（ただよ）と忠佐（ただすけ）の兄弟もいた。特に兄の忠世は武勇に優れたのみならず、部下思いの名将であった。

天正2年（1574）家康が武田の犬居城を攻めた時、大雨のため撤退しようとしたところへ武田勢が激しい追撃をかけてきた。徳川方が逃げる際、忠世は部下の杉浦久勝が負傷していることに気がつき、乗っていた自分の馬を杉浦に与えようとした。しかし、杉浦は自分のような軽輩が助かっても大將が打たれたら何にもならない、とどうしても受け取らない。「わしはどうあっても乗りませぬぞ」と頑強にことわった。

忠世は「乗るなら乗れ、いやなら馬を捨ててこい」と言い捨ててさっさと行ってしまった。気を利かせた部下が引き返して来て、杉浦を馬に乗せて助けたという。助かった杉浦は感激の涙にむせんだにちがいない。

家康はこうした心の熱い武将たちに支えられていたのである。

大久保彦左衛門はこの兄弟の弟であり、忠世のもとで戦場を駆け巡っていたのである。この時代とともに戦った戦友たちが、譜代の中の譜代である。

彦左衛門は、後に『三河物語』を書いて、この時代の様子を活写しているが、譜代の気持をもっとも良く知る立場にいたのは間違いない。

家康が秀吉の前で水火の中でも命を惜しまないと見得をきったのも、あながち口先だけのことではなかったのである。

御家人の五百や千の命を…

秀吉の死後、石田三成と家康の間が次第に険悪になってきた。三成の西軍と家康の東軍の決戦は、いよいよさけられそうにない。

その時、家康は、三成を挑発するかのように大坂を去り、上杉討伐を口実にして会津へと向かう。その際、伏見城に譜代の名将鳥居元忠を1,800人の部下とともに残してゆこうとする。西軍の決起を見越したおとりとして、譜代の名将をむざむざと敵軍のただ中に残してゆくのである。61歳の元忠は数々の武功を残した歴戦の功臣である。正に譜代の中の譜代。家康は伏見城に入り、別れの盃を交わし、遅くまでしめやかに語り合った。元忠の退席後、家康はしきりに袖で涙をぬぐったという。しかし、元忠は「この大事ないくさに、われら御家人の五百や千が命を捨てることをなんで悲しまれるのか」と大声で叱咤したという。

家康の予想どおり、その40日後には、西軍は伏見城に攻撃をしかけた。元忠は奮戦し10日間もちこたえたものの、ついに力つき、全員が戦死して伏見城は落城した。

ここに関ヶ原の戦いの前哨戦の火ぶたが切つて落とされたのであった。

この鳥居元忠の気持、行動は、必要なら主君のために命を投げ出して当然とする猛烈な自己犠牲の精神であり、ここに水火を恐れぬ徳川譜代の心意気の典型を見ることができる。

こうした譜代の家臣たちに支えられて、家康は関ヶ原の合戦を勝ちぬぎ、天下を手中にした

のである。

平和な時代の武士たち

江戸転封に際して家康は、譜代衆の中から主なものに1万石以上の知行を与えて、大名にとりたて江戸の周辺に配置した。この際、大久保一族の中からも、長兄の忠世が小田原45,000石、続いて関ヶ原の合戦の翌年次兄の忠佐も上総茂原5,000石から駿河沼津20,000石に栄転した。こうして家康は23名の譜代大名を取り立てた。また二代將軍秀忠もさらに33名の譜代を大名に取り立て、しかも、幕政から外様の大大名を締め出し、運営の権限を原則として譜代大名にゆだねた。

譜代衆の永年の苦労は報われたというべきであろう。

ところがである。徳川が権力を掌握すると、長い戦国時代に終止符を打って、戦争のない世の中が出来上がった。それは、戦場を駆け巡って武功を競いながら生き残った歴戦の勇士にとっては、生きる場が失われることを意味したのである。

この時期に幕府が必要としたのは、歴戦の勇士ではなく、外交や法律、調査や分析、鉾山開発、都市計画といった能力に秀でた文官、技官たちだった。

こうした中で大名に取り立てられたのは、大勢の譜代家臣たちのほんの一握りにすぎなかった。取り残された武士たちの多くはろくな仕事にありつけず、悲惨な生活を強いられた。大久保彦左衛門もその一人であった。

幸いなことに、彦左衛門の二人の兄は大名に取り立てられ、その子の代には大いに実力を発揮し、活躍したもののやがて政争に敗れて失脚し、一方、彦左衛門が家康からもらった知行はたった千石であった。30年程のち、三代將軍家光の代になってさらに千石加増があったが、それでも合計2千石にすぎなかった。

それに引き換え、戦場さえ知らない青白い文官たちが、どんどん取り立てられ、我が物顔で殿中や城下を闊歩している。

譜代下級武士の不満はうっ積してゆく。

天下のご意見番

大久保彦左衛門の奇矯な行動は数多く伝えられているが、それは、このような譜代下級武士の不満を代弁したものであった。

例えば、彦左衛門は、つねに3尺6寸の長刀を差していたが、殿中ではいかにも邪魔であった。見かねた同僚が、「貴殿の刀は長すぎて、われわれの立ち居振る舞いの邪魔になる。どうか短くしてもらえないだろうか」「よろしゅうござる」

あっさりうなずいた彦左衛門の翌日の登城した姿は、同僚たちを驚かせるに充分であった。彦左衛門の刀は鞘だけ5、6寸短くなっているかわり、中身はそのままなので、刃がむき出しになり、動くたびに同僚の着物を切りつけたり、畳を裂いたりした。まことにぶっそうである。同僚がなぜそんなかっこうにしているのかとたずねると、

「皆の衆の言われたようにしたまでじゃ。短い刀にしたかったが、ご存知のようにわしは小禄者なので余分の刀を買うことができない。そこで、とりあえず鞘を切ったまでじゃ。」

同僚たちはあきれて、ため息をつくのがせいっぱいだった。

こうした行動は不満のためこんでいる下級武士たちの共感をよび、江戸っ子の拍手喝采を博した。いつのまにか「天下のご意見番」というニックネームがついた。

しかし、そんな不満をため込んでいるのは譜代の武士だけではなく、武士階級全体が、もはや武力を必要としない平和な世の中に無用の存在となり、浮き上がってしまったのである。

これを現代の社会におきかえると、会社の創業期に汗をかいた古強者たちが、コンピューター化した社内で為すすべもなく窓際に追いつめられ、居酒屋でストレスを発散させている姿と二重写しに見えてくる。

徳川幕府の確立には不可欠であった武力が、早くも老廃物化したのであろう。

そこで、家康を押し上げた譜代門閥のこうした老廃物化に幕府はどのように対処したのか、それに対して譜代門閥の側がどのように対応したのかを見てみよう。

譜代門閥と側用人

2代将軍秀忠、3代将軍家光の時代に幕府の機構も次第に整備され、主要なポストは親藩譜代によって占められてゆく。彼らは代々そのポストを既得権として守ろうとし、代替わりなどでいったん失うとポスト回復のため、涙ぐましい努力をしなければならない。

やがて、組織機構は確立し、その構成員が固定してくると、家柄は悪くとも有能な人材を活用する場がなくなってくる。いつの時代でも、有能な人材を発掘し、登用することは、組織にとって死活問題であるから、譜代門閥の厚い壁をかいくぐって人材登用の方法が工夫される。

その一つに8代将軍吉宗が始めた足高（あしだか）の制がある。役職に相応しい家禄がなくとも、俸禄をつけて登用する道が開かれたのである。この制度によって大岡越前守忠相、青木昆陽、荻生徂徠、室鳩巢など思いきった人材が抜擢された。

さらに、職制の枠外にポストを新設する手段もとられる。その典型が側用人である。側用人は、本来、将軍の身の回りの雑用をこなす役割であるが、これが将軍と老中の間にたって相互の意志伝達をになうようになってくる。こうなると側用人は次第に将軍の意志を代弁するようになり、大きな権力を手に入れてしまう。

5代将軍綱吉の下で権勢をほしいままにした柳沢吉保と、10代将軍家治の時代に権力を握った田沼意次がその代表格である。

特に田沼は将軍を政治から遠ざけ、学問遊芸に専念するようにしむけながら、自ら側用人と老中を兼務し、専権をふるった。主要なポストは田沼派で押さえ、大奥まで掌握し、長期にわたって政権を運営した。

この時代に対する評価は、まっ二つに分かれる。

一方で、田沼は権力を利用して賄賂をとり、人事を自分の都合でねじ曲げた、悪徳政治家であるとし、日本史上の三大悪人の一人とまでいう人もいる。

他方、田沼は、行き詰まった幕府政治を建て直すべく、有能な人材を起用し、新規事業を起し、言論に関与せず、学問芸術は自由にのびの

びと花開いた。田沼こそ近世日本のもっとも革新的な政治家であると絶賛される。

田沼が商人を優遇し、賄賂をとり、人事を左右したということは事実のようだ。と同時に、破綻した財政を立て直すべく、意欲的な新規事業を次々に打ちだしたことも間違いないようだ。例えば、中国への輸出を増やすため、アワビ、ホタテなど東北・北海道の海産物の増産、鉱山の開発のほか、印旛沼の干拓、北海道の開拓などきわめて壮大なプロジェクトにも着手した。

田沼は長期間権力の座にあったため、人事も田沼の意のままに行なった。このため、役職から排除された譜代門閥層の不满はふくらんでいた。

譜代門閥の不满と寛政の改革

この田沼時代に終止符を打ったのが、譜代門閥層のこうした不满をバックに立ち上がった松平定信であった。彼は8代将軍の孫という家柄の良さ、目から鼻へぬけるような秀才といわれたエリート中のエリートであった。彼は、地方の弱小譜代の藩主を味方に取り込んだほか、その政策は水戸を始めとする親藩譜代の意志を体现するものであったと言われている。老中首席の地位につくと、定信は田沼を追放するとともに田沼派の人事を一掃し、次々に改革の手を打った。

寛政の改革である。

定信がめざしたのは、永年の田沼政治によってゆるんだ綱紀を引き締め、先の吉宗による享保の改革、さらには幕府創業の時代へもどすことであった。奢侈禁止を手始めに、蘭学をはじめ朱子学以外の学問への弾圧、芝居の追放など芸術への干渉、武道と学問を追求する禁欲的な生活を押し付けた。商人の活動に対しても制限を加え、その典型が旗本の借金を棒引きにする棄捐（きえん）令であった。

ここで、前節で検討した江戸時代の常識を思い出してみたい。

鎖国、米本位制、参勤交代、世襲と身分制度、の四つであった。

田沼の政策は、これらの常識を突き崩す危険な要素を孕んでおり、それに対し、定信の寛政

の改革は常識を補強、再構築しようとする傾向が強い。衰退期に入った幕府を創業期のモデルを手本にして立て直そうとしたわけだ。寛政の改革が保守的・反動的な性格を帯びているのはそのためである。その際、譜代門閥層は、既得権の回復のために、定信と手を結んだのだ。

しかし、こうした反時代的な政策が成功するわけがない。当初、世論をバックに圧倒的な支持率をもって政権の座についたものの、時代ばなれした改革政治のあまりの苛烈さに民心はたちまち離れ、白河の清きに魚も棲みかねて、元の田沼のにごり恋しきなどの狂歌がでまわった。白河は定信が白河藩主であることにかけてのものだが、こうして寛政の改革は7年間で挫折し、定信は白河へと帰っていった。

江戸時代を通じて、三大改革と呼ばれる、享保、寛政、天保の改革があるが、いずれも時代の環境の変化にあわせて、常識の変更を目指したのではなく、常識を補強、再確認して、創業時に戻そうとする保守的な性格をもっていたといえる。

江戸時代の三大改革は、その本質において、前節で検討した「常識への差戻し」と考えるべきものである。

こうしてみると、譜代門閥層の果たした役割も明らかになる。幕府の成長期には幕府成立にあたって中心的な役割を果たしたが、衰退期には現状維持、さらには過去へ引き戻す保守的な役割を果たしたことが見えてくるのである。

2.3 幕府の金、物、人

幕府権力のもう一つの原資、期待

これまで、徳川幕府の権力の原資として武力をとりあげ、その形成と変質の過程を見てきた。しかし、徳川幕府の権力のもう一つの原資として、世の中の徳川政権に対する期待という無形の資源が考えられるようだ。

戦国時代は、百姓にとっては悲惨な時代だった。住まいや納屋は常に略奪や放火の対象にされ、男たちは戦さのたびに戦闘力として駆り出され、女子や子供は奪い去られ、田畑は荒らされ、作物は奪われた。不安に脅える百姓はやむを得ず武装して自分を守る必要に迫られた。戦

場においても、真っ先に犠牲になるのは貧弱な武装しか持たない駆り出された百姓たちだった。こうして、家や妻子を奪われた百姓たちが流民化し、他の村落を襲うことも珍しくなかった。こうして農地は荒廃し、百姓は極端に疲弊していった。百姓以外の人々も戦乱の世を厭い、その不安、不満は募るばかりで、それが頂点に達したとき、戦国時代は終り、新たに江戸時代が始まるのである。

江戸時代は、応仁の乱(1467年)以降の長い長い戦乱の世に終止符を打つために、徳川家康が征夷大將軍に任じられて、江戸に幕府を開いた1603年に始った。国内をほぼ平定した家康は、これまでの“乱”とは反対の“治”の世すなわち平和で安定した社会を築こうとした。そのためには、これまでの社会の常識を一変させなければならぬ。なぜならば、一新された常識が新しい社会づくりのベースとなるからである。前節で検討した四つの常識はそうしたものである。

権力者となった家康は戦さの芽を次々と摘み取り、インフラを整備するのに辣腕を振るった。

人々がこれらのことを見るにつけ、聞くにつけ、彼らのうっ積していた不満、不安は次第に減少し、その分徳川幕府に対する期待が大きくなっていった(この点、將軍宣下と江戸遷都の意味は小さくないだろう)。そして新しい常識がいつそう浸透し、信頼されていった。良循環である。こうした良循環の中で増大する人々の期待感は、徳川幕府の権力を育む無形の資源となっていた。

しかし、この期待感という資源もいつまでも続く無限なものではない。そもそも、期待感とは不安や不満が減少することから生じる。したがって、社会が成長し繁栄しているときは人々の期待感は持続する。しかし、社会が衰退し始め不安や不満が増大するようになると、期待感は失われやがて絶望が募っていく。経済が成長し始めた1960年代の頃の日本の若者は希望に満ちていたが今の若者には不安と絶望しかないといわれる現象の裏には、こうした否定しがたいロジックがあるのではないか。

これまで、徳川幕府の権力を武力という有形

の資源と期待という無形の資源との関連で見えてきた。次に、幕府はこうした権力によってどのように金、物、人といった資源を利用し、消費していったのかを見てみよう。

幕府の財力

まず幕府の財力の源泉として主に次の3つを検討してみよう。

1. 幕府直轄領
2. 貿易の独占
3. 主要鉱山の直轄

1) 幕府直轄領

関ヶ原の合戦に勝利すると、家康は西軍の大名たちに対し大々的な改易（とりつぶし）、減転封を進めた。西軍の外様大名のうち88名を改易し416万石を没収、大大名5名を減転封し216万石を奪った。

その合計は632万石という巨大なもので、全国の総石高の三分の一に達するものであった。家康はこれを東軍に属して軍功のあった外様大名に与えて、東北から九州までの辺境地帯に配置した。

関東から中部、関西の主要部は、親藩、譜代大名で押さえたのである。幕府成立後もいろいろ理由をつけて改易、転封を進め、最終的には、全国3,000万石のうち徳川一門で、750万石を取り込んだ。このうち譜代、旗本で300万石、幕府直轄領は450万石に達し、徳川一門と譜代は圧倒的な財政基盤を築いたのであった。

しかし、いかに強力な権力をもってしても、直轄領をいつまでも増やし続けることはできない。では、そこから搾取できる年貢米はどうであったのか。

直轄領は勘定奉行が元締めとなるが、実際に年貢を徴収するのは代官である。年貢は当初、収穫量の三分の二を取るのが原則であったが、次第に年貢率も減少し、100年後には三割を割り込む状況になっていたらしい。ものすごい落ち込みだ。

年貢をキチンと取り立てるには、それ相応の管理能力が必要だ。一方、直轄地はもともと広くかつ複雑に分散している。このような直轄地

が増え、幕府の管理能力を超えるほどになると、当然のことながら年貢の取り立ては杜撰になり、目こぼしも多くなる。直轄地の年貢米取立て率のひどい落ち込みには管理能力の問題があったのではないか（天領とその他の諸藩の風土、気風を比較して前者のそれがノンビリしている、とは司馬遼太郎氏が指摘するところだが、これなども管理の厳緩が一因しているのではないか。司馬遼太郎『この国のかたち (2)』)。

もっとも、元禄から享保にかけて、つまり江戸時代前期の後半から中期にかけて耕地面積が大幅に増加し、農具の改良が進み、肥料も進化して、収量も大幅に増えていった。これは諸藩でも同様で、各地の農民は、米以外にも競って、木綿、菜種、藍、紅花、煙草など換金作物へと生産をシフトして、その分農民は次第に豊かになっていった。

江戸時代を通して、武士という、生産をせず消費するだけの階級の需要を満たすために必然的に商・工業は発達した。米以外の農作物や商工業の発達により、総生産に占める米のウェートは次第に低下していったにも関わらず、武士の俸禄は相変わらず米で支給されていた。そのため、商人が豊かになるのに反して武士は次第に貧困化していった。

当初、幕藩体制の確立に寄与した年貢米は、次第にその体制を突き崩す一因と化していったのである。

2) 貿易の独占

江戸時代の輸入品というと、吉宗が江戸まで連れてきた象とか、漢方薬として輸入していたミイラなど珍奇なものを想像しがちであるが、実はダントツに多かったのは絹であった。

戦国時代は、いち早く鉄砲を輸入した信長が他を圧倒して勝利を納めたが、戦国の世が終って平和な江戸時代に入ると、いち早く貿易の主役に躍り出たのが絹だったのである。

養蚕は日本でも平安時代には全国に広がっていたが、永年にわたって戦乱が続くあいだ、次第に生産も減少し、技術も失われていった。一方、中国は安定した社会の中で、上質な絹の生産が軌道に乗っており、各国が競って買い求め

ていた。当初はポルトガルが、中国で買った絹を日本に売って巨利を得ていたが、そのうま味に気づいた幕府は、絹の輸入を独占し、また特権商人に権利を与えた。

平和が到来した日本は急速に絹の需要が増加していった。絢爛豪華な元禄文化を彩ったのは、こうして輸入された絹だったのである。しかし、絹の輸入のために国外に流出する銀の量があまりに多くなったため、幕府は次第に輸入を制限し、さらにたびたび奢侈禁止令をだした。

絹をもっとも求めたのは、宮廷、大奥、豪商の婦人たち、そして花柳界であった。窮乏化する武士階級はそれを苦々しく見ていたに違いない。財政再建に立ち上がった将軍や大名は、粗衣粗食で、廻りにも質素を求めたが、商人の贅沢を止めることはできなかった。

江戸も中期になると、国内の養蚕も次第に回復し、全国の藩が生産を奨励したこともあって、国産の絹は質量ともに向上していった。幕末になると日本の絹は世界から注目されるまでになり、開港とともにヨーロッパへ向けて輸出がはじまり、明治、大正、昭和と、主要な輸出産業となったばかりでなく、急速な近代化と軍備のための重要な資金源となっていった。

こうして見てくると絹の輸入は当初、幕府に大きな利益をもたらした。しかし、銀の流出により財政基盤が圧迫されたためドル箱の絹の輸入は縮小した。一方、国内に養蚕が普及すると、全国の農民と藩の財布は潤ったが、生産された絹は都市の商人らが購入消費してくれることが条件のため、絹の生産と消費は農民・商人・諸藩をうるおしたが、幕府はこのサイクルからとり残された。要するに、貿易の独占権という無形の資源は幕藩体制の確立に役立ったが、その体制が安定し経済活動が盛んになるにつれて独占力が次第に弱くなり、幕府の財力も衰えていったのである。

3) 鉾山の直轄

家康が幕府を開いたころ、日本は空前のゴールドラッシュにさしかかっていた。それは日本の歴史上空前絶後のものであるばかりでなく、世界史の中でも特筆に値する大量の金銀産出量

を誇っていた。家康は、鉾山を次々に直轄とし、独占したので、家康が死後に残した金銀の総量は今日では見当もつかないほど巨大なものであったらしい。

このゴールドラッシュは一人の辣腕の行政マンの存在なくしては現出しなかった。

それが猿楽師上りの大久保長安である。大久保の名から想像できるとおり大久保彦左衛門と関わりのある人物である。彦左衛門の長兄忠世の長男忠隣（ただちか）はかすかすの戦場で大きな武功をあげて家康から絶大な信頼を得たのみならず、幕府成立後は秀忠の側近として多方面に能力を発揮し強い信頼を勝ち得た。この忠隣の下で、行政に、土木事業に辣腕を振るい代官頭になったのが長安であった。忠隣に気に入られて大久保の姓をもらい大久保長安と名乗るようになったのはそのためである。多方面に活躍した長安が最もその手腕を振るったのが鉾山経営であった。伊豆、石見、佐渡と長安が奉行になると魔法のように金銀の産出量が増え、家康を狂喜させたと言われている。

しかし、長安が産出量を伸ばしたのは手品ではなかった。科学的な技術を駆使したからであった。従来の縦掘りは少し掘ると水が溜まるとか、ヨーロッパ伝来の水銀を使ったアマルガム法により効率良く大量の金を取りだしたとか、当時であっては画期的な技術革新を次々と取りいれて指導したからであった。

大成功をおさめた長安の生活は「日本一のおごりもの」と言われるほど贅沢をきわめ、支配地へ赴く時は家臣のほか美女20人、猿楽師30人、召使の女中を多数従え、まるで大名のように250人の大行列をつくって行ったと言われている。

慶長18年（1613）、長安が病死すると、その庇護者大久保忠隣が、政敵の本多政信によって失脚させられた。長安はすでに死亡していたにも関わらず、不正蓄財の嫌疑をかけられて、その子7人が切腹、親類縁者も大量に処罰され、さらに長安の死体も墓から引きずり出されたうえ、斬首された。草創期に異能を発揮した傑物の悲惨な最後であった。

その鉾山も、大幅増産の結果、次第に資源は

枯渇し、元禄時代に入るとどの鉱山も産出量は激減してしまった。

ゴールドラッシュは終り、不要となった人物が葬り去られたのである。しかし、家康が生涯に蓄積した巨大な財宝は江戸初期のインフラ整備の他、東福門院和子への支援、二条城や日光東照宮の造営などに湯水のごとく使われた。さらに、金貨、銀貨の鑄造に生かされ、江戸時代の経済活動を軌道にのせることができた。

しかし、こうした大出費の結果、さしもの巨大な金蔵も元禄末期ころには次第に底が見えてきた。有限な資源を消費し続ければ、やがて枯渇するのは当然であるが、鉱山の枯渇とともに江戸時代の急成長も行き詰まりの様相を呈してきた。

それは、あたかも石炭石油に依存した産業革命以後の現代文明の行く末を暗示するかのようである。

子だくさんこそ家門繁栄の礎

次に、人的資源について見てみよう。

徳川の家門は代々三河地方で勢力を拡大してきた一豪族であったが、代々の当主は武力において勢力を拡大したのみならず、子作りにおいても精力的であった。その子供たちが独立して、すでに多数の支族をもうけてきた。それが松平一族であり、そのうえに家康自身も二人の正室と16人の側室を持ち、合計16人の子供を産ませている。この中から将軍を出す徳川本家の他、御三家や徳川一門つまり後の親藩を構成する家をつくり出して幕府を支えたのである。

将軍の後継者についても次々に本家あるいは御三家の中から後継者を出し、260余年15代にわたって血統を絶やさず、政権を維持することができたのであった。

これを、秀吉の場合と比較してみよう。秀吉は24歳でねね（北政所）と結婚したが、どうしても子供ができず、次々と16人まで側室を設けたが、やはりなかなか子供はできなかった。子供ができたのは、52歳になって側室として22歳の茶々（淀君）を迎えてからである。しかも、一人目の鶴丸は2歳で死亡し、4年目にやっと二人目の秀頼を得た。やっと後継者を得た秀吉は狂喜したが、残念ながら秀吉はすでに58歳と

なっており、残された余命はわずかであった。

秀吉は5歳の秀頼を残したまま息を引き取り、さらに17年後大坂夏の陣において大坂城の天守を焼く劫火の中で淀君と秀頼を失い、豊臣家は断絶した。

子作りにおいても家康は秀吉に完勝したのである。

人的資源に恵まれなかった事は、秀吉にとって大きな不幸と言わなければならない。

この時代においては、一家の繁栄のためには世継ぎの有無は決定的に重要だったのである。

さらに、婚姻関係は、味方をふやす有力な手段としてさかんに活用されたので、武将の女子は政略結婚の手段として多いに利用された。大名同士の勝手な婚姻を禁ずるという秀吉の命令にもかかわらず、秀吉が没すると家康はどんどん政略結婚をすすめ、有力大名を抱き込んでいった。徳川氏と婚姻関係を結んだ外様大名には、豊臣のほか、前田、伊達、毛利など有力大名がずらりと名を連ねている。

対皇室外交の手段として使われた東福門院和子の入内と皇女和宮の降嫁は数ある政略結婚の中でも最大の企みであった。

家門の繁栄のためには、人的資源として子女の果たした役割は非常に大きかったのである。

将軍を継承するための体制も、御三家のほか、のちには御三卿までつくられ、万全の体制が整えられた。

ハリスに見破られた将軍の実態

そこであらためて、肝心の将軍について検討してみよう。

徳川家にとって人的資源の頂点は将軍であるが、その継承においては血統主義が厳守された。将軍の長男、でなければ、最も血筋の近い近親者が継承者となるのである。しかし、この原則で選ばれた将軍は初期には3代家光、5代綱吉、8代吉宗と個性的で力強い将軍を出したが、代を重ねるにつれて、その資質は次第に劣化し、後半にはいると、ついに成人としてもまともに生活する能力のない人物が次々に将軍の座につく事態にたちいたった。

9代将軍家重は、生来病弱で言語不明瞭のた

め、その言葉は側用人の大岡忠光のほか誰も聞き取ることができなかった。その15年の在位中は酒色にふけてすごした。

11代家斉は50年間という最長の在位を誇ったが、その在位の初めは松平定信による寛政の改革、最後は大塩平八郎の乱という幕政の危機のさなかであったが、政治に興味を示すことなく逸楽にふけり、側女40人、産ませた子供55人という異常な生活をおくった。この時代、幕藩体制は傾き、海外からの脅威も迫っていたが、文化文政という江戸文化の爛熟期を迎えていた。

13代家定は30歳すぎても庭のガチョウを追い回すような奇癖があり、アメリカ総領事ハリスが大統領の国書を手渡すために謁見したときも、自分の頭を左肩の後ろへそらし右足を踏み鳴らす行動を3、4回繰返したとハリスによって目撃され書き残されている。

インド、中国とヨーロッパ列強の植民地化の波が打ち寄せ、日本に大きな危機が迫っているこの時にすら、幕府の最高権力者がこの有様である。将軍の劣化が幕府の衰退に拍車をかけたことは間違いない。

当初、あれだけ豊にあった各種の資源も260年の間にあるものは頭打ちとなり、またあるものは次第にその効力を弱めたり、劣化していった。そして、それにともない江戸時代も衰退していったのである。

2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折 なぜ井伊直政が？

徳川家康は、1600年の関ヶ原の合戦で、石田三成を主将とした西軍を破り、事実上の武家社会の頂点に立つと、1603年には朝廷から征夷大将軍に任じられ、さらに、江戸に幕府を開いて、全国支配の形式も整えた。

こうして、戦国武将の一人に過ぎなかった徳川家康をこの国のナンバーワンに押し上げたのは、ほかならぬ譜代の家臣団であった。

彼らはここまではひたすら武力によって家康を支え、いわば組織の成長の原動力になってきた。では、幕府の成立後、彼らは幕府の中でどんな役割を果たしていったのか。これについて、ナンバーツーを自認する井伊家を取り上げ、そ

の波乱の歴史を簡単に見てみよう。

かつて譜代の家臣を代表していたのは、四天王と呼ばれた、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、そして新参譜代の井伊直政であった。まず、酒井忠次は天正16年（1588）に長男家次に家督を譲って隠居しており、その家次は下総臼井3万石を与えられていた。本多忠勝は上総大多喜、榊原康政は上野館林でともに10万石を与えられ、52歳になっていたのに対し、最も若い井伊直政が39歳で上野箕輪（高崎）に12万石と最高の石高を与えられていた。ともに関東地方の周辺部にぐるりと配置されていたことがわかる。

その石高を見ると、家康が今川義元の人質だった頃を中心に、親子何代にもわたって徳川家につくした古い譜代の家臣に対しては意外にそっけなく、拾われて育てられた駆け出しの井伊直政が著しい恩賞を受けている。ここから家康は過去の業績ではなく、これから働いてもらいたい若い直政を特別に引き立てていることがわかる。

能力と可能性に賭ける若い組織の成長の原則といえようか。

こうして譜代筆頭の位置について井伊家を中心に、江戸時代を通じて譜代の大名がどんな意識でどんな役割を果たしたかを検討してゆくことにしよう。

織田信長が本能寺の変で倒れてから、関ヶ原の合戦で天下をとるまでの17年間、天下取りの戦いの中心にいたのは四天王の中でも最若年の井伊直政だった。家康にとっては、直政こそ年齢的にも体力知力ともに充実したもっとも頼りになる存在だったのである。

こうして家康は、武田信玄から帰属した最強の武将集団をそっくり直政にあずけ、その象徴であった赤備えを井伊家にもみ許した。

赤備えは、鎧、兜、刀、槍、旗、幟とあらゆる装備を赤一色で染め抜くもので、戦場においては圧倒的な威圧感と存在感を示した。

その効果は関ヶ原の合戦において遺憾なく発揮された。

関ヶ原の合戦では、後に二代将軍となる秀忠が榊原康政、大久保忠隣、本多政信らとともに徳川本隊3万を率いて中山道を進み関ヶ原に到着する予定になっていたが、真田昌幸の巧妙な

抵抗にあつて上田城に釘付けにされて合戦に間にあわず、家康の怒りをかい、目通りさえゆるされなかった。

事実、このため、東軍は徳川軍の主力を欠き、外様大名を中心とした戦力で戦わざるを得なかったのである。しかしこの中で、井伊直政の赤備えが、先陣を勤めるはずの外様の福島正則の軍団を押しつけて先駆けし、目覚ましい働きを示して、辛うじて譜代の面目を保った。後に描かれた関ヶ原合戦絵巻でも、赤い幟の林立する軍団はあざやかな存在感を示している。

彦根の地政学的な価値

関ヶ原の合戦で目覚ましい活躍を見せた井伊直政は、譜代家臣の中でさらに大きな功績を認められ、高崎12万石から近江国の佐和山城18万石へと栄転した。佐和山城は、西軍の主将石田三成の居城であったが、琵琶湖の東岸に臨み、京・大坂へ通じる中山道が通り、さらに福井・金沢から来た東北道が交わる軍事的に最も重要な場所であった。さらに琵琶湖は若狭湾から京大坂への物資の搬入のほか、その舟運は彦根を中心とした近畿圏の物流の大動脈だったのである。このため、このあたりは、古来、信長の安土城、秀吉の長浜城と、天下をねらう武將が押さえるべき扇の要のような場所だったのである。

家康にとっては、関ヶ原の合戦ののち、まだ豊臣秀頼が大坂城におり、さらに秀吉恩顧の大名たちが西国に多数残っている情勢からみて、全国支配の戦略上佐和山城の軍事的な価値はきわめて大きかった。



最強の軍団を率いる井伊直政をここに置いたのは、家康の地政学的な判断からして当を得たものであった。

しかし、佐和山城は中世的な山城であったため、すぐ近く、さらに琵琶湖に接して彦根城を築くことになった。直政は、関ヶ原の合戦において、東軍の中央を突破して逃走をはかった島津軍を追撃したため負傷し、それがもつて2年後に死亡した。このため、城普請はそのあとを継いだ直孝の手によって行われた。普請は家康の直接の指示によって、江戸から普請奉行が3人派遣されただけでなく、周辺7カ国、12名の大名が動員される天下普請によって完成した。

彦根城がいかに重視されたかを示すものである。

今も、創建当時の天守閣が優美な姿を見せているが、城郭の大きさに比べて天守閣はいささか小振りである。最終的には30万石になったとはいえ、創建当時は18万石だったので、その家格に合わせて三層と小振りになったという。また、家康が築城を急がせたため、大津城の天守閣を移築したからだとも言われている。

かつては内堀の一画に大きな米蔵が17棟も建っていた。ここに幕府から預かった5万俵という大量の米を備蓄していたという。いつの日かいくさを想定してそのために蓄えたものであろう。

幕府から見て、西南外様諸勢力に対する前線基地と考えられていたことがよくわかる。

しかし、家康がもつとも頼りにしていた直政は42歳で倒れた。だが、2代目直孝も直政の志をつぎ、武勇、政治的判断力ともにすぐれ、大坂夏の陣で大活躍し、家康から「日本の一番武辺」と褒められ、その後の井伊家の性格を決定づけた。さらに幕閣の中でも重鎮として2代、3代、4代将軍につかえ、井伊家に与えられた譜代筆頭の役割をまっとうし、その責任感とプライドを井伊家のみならず彦根藩の中にもしっかりと根付かせたのである。

先鋒は我なり

幕府の中でも井伊家の立場はゆるぎないものがあり、260年の間、5人の藩主が大老の職についている。これは大老職全体の半数を占めてい

る。また多くの譜代大名が何度も転封を繰り返したのに対し、井伊家は幕末まで彦根を動くことがなかった。

幕府が井伊家に求めたものは、一口で言えば將軍家を守るために身も心も捧げることであり、井伊家もその決意を代々守り伝えた。

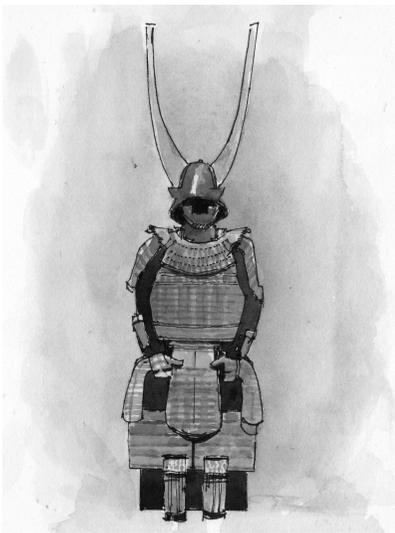
直孝がその子直澄に与えた遺書には、ひたすらご奉公せよ、今後逆臣ありて誅戮（ちゅうりく）を仰せ付けられたときには、早速打ち平らげる心がけを忘れるべからず、と書き残している。

5代將軍綱吉が將軍職を継いだとき、御三家、老中などが集まった席で、由比正雪の乱が話題になった。そのとき水戸光圀（みつくに）が、もしそうしたことがあれば、自分が先鋒となって討つであろうと発言すると、当時の彦根藩主井伊直興は色をなして「先鋒は我なり、敢て他人に譲らず、東照公御遺誡あり」と反論した。

こうして「天下の先手」をつとめる井伊家のプライドは代々受け継がれたのである。

では、こうした譜代の責任感、江戸幕府という組織の中では、どんな意味をもっていたのだろうか。

注意しておきたいのは、直政らの忠誠心はあくまでも家康個人、あるいは徳川家に対するものであり、幕府やこの国に対するものではなかったということである。



また、そのプライドも、身を挺して徳川家につくす決意が出発点であったが、いつのまにかその内容は変質し、その譜代筆頭の家が占めるべき地位への執着へと変わっていった。このポジションはだれにも譲らないというこだわりで過ぎなくなっていたのである。

組織に対してではなく、創業者への忠誠心、あるいは地位へのこだわり。この陥りやすい偏狭さは、組織論として看過できないポイントである。

打ち砕かれたプライド

では、譜代筆頭の彦根藩井伊家は、幕末にはどんな役割を果たしたのかを見ておこう。

ペリーが4艘の黒船をつらねて浦賀に来航すると、日本中が蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

この時から大政奉還までの15年間、それまでの天下泰平がうそのように日に日に政局が変わる激動の毎日が始まった。

この期間にまるで約束されていたかのように井伊家から直弼（なおすけ）という人物が登場し、いきなり大老に就任する。多くの偶然がからみあって実現した人事であったが、幕府の開幕を彦根藩初代藩主直政が助け、それに対応するかのようには第13代藩主井伊直弼が登場し、幕府最後の幕引きの役をになったのであった。

その在職はたったの2年弱であったが、幕末の決定的な事件の当事者として歴史に鮮烈な刻印を残した。

直弼のかかわった事件は次の三つである。

1. 日米修好通商条約の調印
2. 安政の大獄
3. 桜田門外の変

まず、第1の日米修好通商条約の調印は、直弼が大老に就任して、2ヶ月目であり、アメリカの武力を背景とした強引な圧力の前にすでに避けられない既定のスケジュールであったといえよう。ただ、公家、天皇を取り込んだ尊王攘夷派の暴風の前に幕府首脳陣がひるんでいた所に大老についた直弼があいまいなゴーサインを出しただけというのが真相のようである。

これに対し猛然と沸き起こった尊王攘夷の暴風に対して、直弼は大弾圧をもって臨んだ。水

戸を震源地とする尊王攘夷の勢力を一網打尽にしたのである。百名を超える者が検挙、処分され、吉田松陰や橋本左内ら十数名が斬首、切腹、獄門、獄死という厳刑に処せられた。

これが安政の大獄である。

海外からの脅威を目前にしても、直弼の目は国内の政争に向けられていたわけだ。その報復が水戸浪士による桜田門外の変となって現われた。直弼は首をとられ、中心を失った幕府は迷走と衰亡の坂道を転げ落ちてゆく。

この時期、時代の主導権を握ったのは、薩摩、長州、土佐、福井、水戸などであるが、興味深いことに、これらの藩は日本の外周部にあり、いち早くロシア、イギリス、アメリカなど外国船との接触から海外の情報を取得し、強い危機感をもっていた。

それに対し、彦根、会津など海に接することのなかった内陸の藩が世界の情報に立ち後れたのはやむを得なかったかもしれない。

彦根藩は開幕当初には日本の中心部に位置し、家康がもっとも重要な土地として井伊直政に与え、260年の間動くことのなかった土地であった。そこは琵琶湖という、京・大坂から日本海、中山道を結ぶ舟運の大動脈でもあった。

しかし、幕末になると、世界の情勢が激変しており、産業革命を終え、船も帆船から蒸気船へと変わりつつあり、鉄製の大型船が日本近海へ頻繁に出没するようになっていたのである。

水戸藩も、1824年にイギリスの船が突然沿岸に停泊し、野菜などの食料を求めて上陸したことがあった。近海に多くの外国船が来ていることに驚いた藩は海岸防備の重要性に目覚め、大砲の鑄造など、軍備の拡充に努力していた。水

戸藩が太平洋に面した長い海岸線をもっていた事が、この藩に強い危機意識を植え付けたことは間違いない。薩摩、長州などというまでもない。

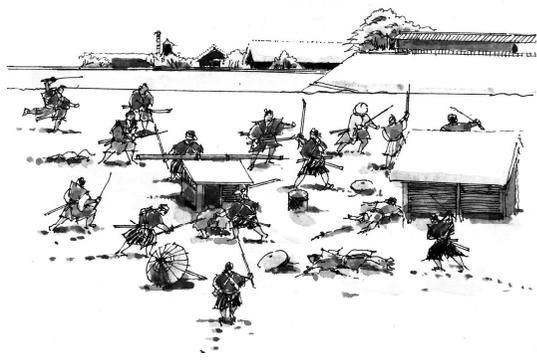
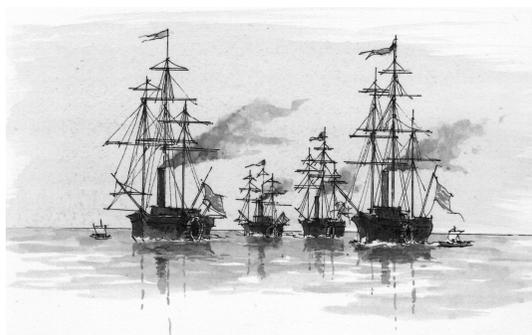
これに反し、彦根藩の不幸は琵琶湖には黒船が現われなかったことである。

家康が、外様藩を日本の外周部へ追いやり、親藩譜代を内陸の当時の枢要の地に配置したことが、幕末にはちょうど手袋を裏返したように、完全に裏目に出了と言えるかも知れない。

ここにも歴史の壮大なパラドックスを見ることができる。

中心を失った彦根藩は、このころから迷走を続ける。第2次長州征伐では、大老の首をとられた屈辱をはらすべく、先陣を受け持って、新しい藩主のもと自慢の赤備えのりりしい武装で出陣した。

ところが、これが長州の奇兵隊の前に簡単に敗退してしまう。譜代筆頭の誇り高い赤備えの軍隊が、高杉晋作が庶民をかき集めて作り上げた急ごしらえの奇兵隊に歯が立たなかった。最新鋭のライフル銃で武装した奇兵隊に対し、彦根藩は戦国時代さながらに鎧兜の武者が法螺貝を吹き鳴らして進んだのだった。戦いのあとには井伊隊がうち捨てた赤備えの鎧兜などが散乱し、無慚な光景を呈していた。こうして、彦根藩のプライドは完全に打ち砕かれてしまった。ここで藩の主導権は尊王派が握り、幕府からは知行を10万石削られ、ついに鳥羽伏見の戦いと戊辰戦争では新政府軍に味方して、幕府軍を敵にまわして戦うところまで行ってしまうのである。



しかし、彦根藩だけが特別だったのではない。家康が西南外様への備えとして配置した紀州も尾張も藩論はみだれ、結局は自藩の安泰のために静観あるいは官軍への協力を約している。他の中小の藩も大同小異である。ひとり会津藩のみ徳川への忠義を貫き、無慚な運命を甘受したのであった。

譜代筆頭として誇り高い彦根藩井伊家のたどった260年を検討して来たが、この藩が徳川を支えた譜代の典型的な姿を示しており、この中に幕府が成長し、そして衰退する要因がよく見てとれるように思われる。

260年の安泰を誇った徳川幕藩体制も成長ゆえの衰退という大原則をまぬかれることはできなかったのである。

これまで、徳川幕府の権力とその権力をバックに利用され、消費された金、物、人といった資源の変遷の過程を検討してきた。このことから、江戸時代の成長と衰退の歴史はおおよそ、

図2のようになるのではないかと。

この図は、図1組織の成長と衰退、の凸型曲線を江戸時代の年表に付け加えたものである。しかし、この一本の曲線が無機質な年表に命を吹き込み、歴史のダイナミズムを語るものに変えるのだ。

図2によれば、その左半分は江戸時代の成長過程であるが、その前半は敵対勢力を改易、転封して、幕府の武力と経済力を拡大している。この間米の収量も増大し、百姓も豊かになる。その後半に入ると安定した秩序の上に絢爛たる元禄文化の花が開花するが、まだ上方中心である。しかし、早くも幕府の財政は傾き、しだいに行き詰まりが明らかになって、将軍吉宗の時代を頂点として、グラフの右半分の衰退過程に入る。田沼時代から文化文政の時代へと時代が移る中、蘭学や浮世絵など江戸時代固有の多彩な文化が開花してゆく。しかし、財政はいよいよ破綻し、寛政、天保と改革が行われるが失敗し、内憂外患の時期を経て幕末の動乱期へと突

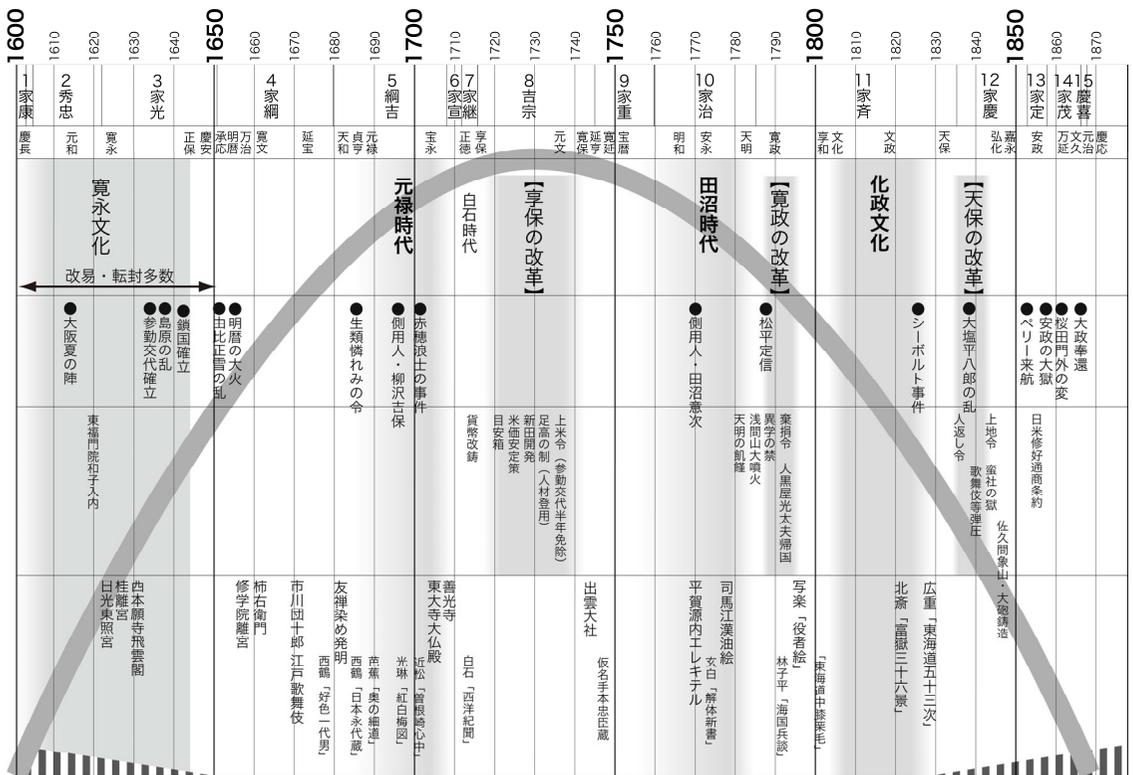


図2 江戸時代の成長と衰退

入してゆくのである。なるほど、この図によって大雑把ではあるが江戸時代の盛衰の様子がわかる。

一本の凸型曲線の効用は、歴史の躍動を浮き彫りにすることにとどまらない。他に、それは歴史における対称性や規則性などを容易に気づかせてくれるという効用もある（これについては、本稿第Ⅱ章、江戸時代の春夏秋冬、で論じるつもりである）。

まだある。「芸術はその時々世相を映し出す」とはよく言われ、その通りであろう。しかし、そこで言われている「世相」とは時の流れ、傾向、勢い、さらにズバリ言えば、「組織の盛衰」のことではないかと、この図は示唆している。してみると、その他思想、政治、経済なども、それを育んだ時代の盛衰というものを抜きにしては語れないのではないか。

凸型曲線おそるべし！

(イラスト 坂田 融)

【参考文献】

- 朝尾直弘『天下一統』体系日本の歴史8 小学館 1988
 池上裕子『織豊政権と江戸幕府』日本の歴史15 講談社 2002
 大和田哲男『豊臣秀吉』中公新書 1985
 北島正元『江戸時代』岩波新書 1958
 北島正元『徳川家康』中公新書 1963
 北島正元『幕藩制の苦悶』日本の歴史8 中央公論社 1974
 司馬遼太郎『この国のかたち』2 文春文庫 1993
 二木謙一『関ヶ原合戦』中公新書 1982
 野口武彦『井伊直弼の首』新潮新書 2008
 彦根市史編集委員会『新修彦根市史』第2巻 彦根市 2008
 藤木久志『刀狩り』岩波新書 2005
 藤野 保『徳川幕閣』中公新書 1965
 D.H.メドウズ他『成長の限界』ダイヤモンド社 1972
 横田冬彦『天下泰平』日本の歴史16 講談社 2002
 吉村 昭『桜田門外の変』新潮社 1990